

## 6人の素敵な先生との対話を終えて

インタビュー：神戸大学大学教育研究推進室室長 米谷 淳

男女共同参画推進室の依頼で、6人の先生にインタビューする機会を得た。インタビューに応じていただいた5人の女性教員と1人の男性教員は、誰もがそれぞれの研究と経験を生かして授業づくりをしておられ、教育と研究への熱い気持ちと真摯な姿勢と大学生への暖かくも鋭い眼差しを感じた。以下、インタビューを振り返り、各教員の印象をまとめ、コメントする。

**ツェンコヴァ・ルミアナ先生**は努力と工夫のブルガリア人である。モスクワに留学した時、ロシア語が全然通用しなくて、研究しながら覚えた。日本でも研究の必要に迫られて日本語を覚えた。神戸大学では日本語で授業をしているが、ワークショップ形式で学生と一緒に授業を準備する。これは苦勞しながら編み出した方法であるという。大学教員になるため、努力と工夫で道を切り開いて来たが、「一人でできるとは思わずに、自分のやりたいことをはっきり見せることも大事」と語る。「天は自ら助くるものを助く」を文字通り生きている。

**林良子先生**は文理融合を地で行く、多才なマルチリンガリストである。東京外語大学の学部と修士課程でドイツ語を専攻し、ドイツへ留学した。その後、音声学の研究を続けるために東大大学院に進み、最先端の脳研究で医学博士を取得。留学中に知り合ったイタリア人と結婚し、日本とイタリアを往復する。最近はイタリア語の本を書くまでになった。脳研究のための生理学は研究の必要に迫られて学んだ。イタリア語も生活の必要に迫られて学んだ。就職に際しては色々苦勞したが、英語教育だけでなく日本語教育の資格や経験があることが幸いして大学に職を得たという。大学生は是非とも海外留学すべきと語る林先生の生き方は、「多分野=多文化(=多言語)」を物語っている。

**日浦直美先生**は、絵に描いたような女性教員のロールモデルの一つを体現されている。様々なキャリアを経験しながら、何かに導かれるように大学教員の道を進んでいった。日浦先生はその時々感じた違和感を原動力としてパワーもキャリアもアップさせた。OL時代に感じた女性のキャリアイメージに対する違和感や、白いスーツに赤いボールペンで落書きした小学1年生についての児童相談員の態度に対する違和感が大学教員のキャリアにつながっている。保育者養成と幼児教育研究の第一線で活躍されている現在、「準備は100でも、時々保育の現場での感動した体験や子供から学んだことを交えながら、65か70ぐらいの授業をやっています」と語る。こうした人を思いやる柔らかな姿勢は幼稚園教諭として幼稚園児に接していた若い頃と変わらないのだろう。

**西村智先生**は、エネルギーで上品さを失わない関学ガールの模範と言える。関学で労働経済学を専攻し、フランス留学後、母校で教員となった。経済学からジェンダーを研究しており、ヨーロッパでも「女性の背中を押してあげることが大事」にされているという。「ゼミでは上品に人を押しのけなさい」と学生に言っている。ゼミ指導は熱い。個人

指導を大事にする。「良い発表は段取りが命」と、1時間もすることがある。「若いときは、そのバランスがむちゃくちゃだったと思います。でも失敗を繰り返して、改良して改良して、やっと今、ちょっとだけ落ちついてできるようになったという感じ」と語るが、相変わらずクリエイティブなことが大好きで、授業もイノベーションし続けているに違いない。

**池田雅則先生**は「まっとうな」教育学者である。私塾研究で優れた業績をあげている一方、遠隔授業や大人数授業で苦勞しながら創意工夫でなんとかしようとしてきた。看護学部のため、学生、教員ともに女性がメジャーなので、「なるべく清潔でいよう」と努めながら、「男性であることが緩衝材的になっている」と自覚し、持ち味の優しさと人当たりのよい人柄、教育者としての熱さ、一級の教育学者の学識と見識により学生に慕われ、気軽に相談できる先生になっている。

**横山由紀子先生**は恩師の背中を追い続けている。大学3年の時に優れた経済学者に出会って経済学に目覚めた。「その先生は考える力、本質を見抜く力を持った方で、とても感銘を受けました。」ある時から授業のスタイルを講義形式から討議形式に変えたのも、学生に「客観的に資料をみて、自分で考える力をつけてほしい」から。「記事を読ませて、頭だけではなく、心が感じる違和感によって本質を見抜く力を養いたい。」このように語る横山先生は、まさに自分が大学3年で出会った先生の姿を学生に対して示すことで、「本質を見抜く力」をもった経済人を育てようとしている。

以上6人の先生と出会い、教員のキャリアや授業について語り合うことで思ったことは、全員共通して、教えること（講義・ゼミ）、学ぶこと（学習・研究）、生きること（生活態度、人生経験）が三位一体となっているということである。研究が教育を支え確固たるものにし、人生経験が授業に深さと面白みという味わいを生む。こうしたことを改めて確認でき、大いに刺激される対話となった。